

思い出に残る論戦は？

新自由主義を実行に移した竹中平蔵さんとの論戦です。竹中さんは経済政策担当大臣として、企業がもうかれぱやがて利益が国民に回ると主張していましたが、私が指摘したようにすべてゴマカシでした。

竹中さんとは50回以上論戦しましたが、経済書を片っ端から読み、人生で一番勉強しました。

趣味は絵本の収集

趣味を聞かれ「絵本の収集」と答えると、たいていの人は「清酒の収集の間違いでは」といいます。

十数年前、書店でたまたま見つけた反戦絵本『エリカ・奇跡のいのち』に感動して以来、絵本の魅力に取りつかれ、現在、蔵書は800冊をこえ、インスタグラム(@mikishidaimon)でも紹介しています。

入党のきっかけは？

23歳のときアルバイトをしていた生協で、食堂のおばちゃんから「赤旗」を勧められました。ノンポリでしたが、モノを読むのは好きで「世の中こうなっていたのか」と毎日、目からウロコが落ちる思いでした。

3ヵ月ほどしてどうしても共産党に入りたくなり、地区委員会を訪問して入党しました。

少年時代は「問題児」

中学の初めの頃は学校にも行かず、繁華街をぶらついてばかりの問題児でした。植山忠次郎先生だけは見放さず、自宅に訪ねて来ては「きつねうどんを食いにいこか」と連れ出してコンコンと説教しました。

私もコン負けして何とか立ち直りました。いつも先生がいていた「意気に感じる心」が座右の銘に。

大門さんてどんな人？

インタビュー

参院選

憲法9条守り抜き政権交代の足がかりを



京都府北部の商工会で(2021・4)



大阪のカジノ予定地を調査(2018・6)



滋賀・響庭野演習場を調査(2016・8)



兵庫の政府交渉で(2020・2)



「徳田の壁のグラフを示して質問する大門さん(2019年10月、参院予算委)」

参議院議員 大門みきし

略歴 1956年1月、京都市生まれ。本家は大阪交野の造り酒屋。神戸大学中退。元東京土建本部書記長・全建総連中央執行委員。参院議員4期目。他党も認める経済論戦の第一人者。歴代首相、財務相を相手にした論戦には定評がある。
・家族は妻と二男
役職 党参議院国会対策副委員長。予算委員、財政金融委員、党SDGsプロジェクトチーム事務局長。党中央委員
著書 『ルールある経済ってなに?』『属国ニッポン・経済版』『新自由主義の犯罪』『カジノミクス』(いずれも新日本出版社)

やさしく強い経済 弱肉強食の冷たい新自由主義は、富を大企業や富裕層に集中させ、経済全体の停滞を招きました。賃金を引き上げ、社会保障を拡充する一人にやさしい経済に転換すれば、消費や投資にお金が回り経済も成長し、パンデミックにも強い経済になります。

政治動かす 提案力の抜群

コロナ 持続化給付金 実現

新型コロナ拡大で収入が半減した中小事業者などを支援する持続化給付金。倒産しなくてはならぬと喜ばれました。2020年4月の決算委員会でも安倍首相(当時)に提案したことから実現。フリーランスにも対象を拡大させました。

税制 財源示し不公平ただす

消費税減税など不公平な税制をただすと同時に、財源を示し提案してきました。所得が1億円を超えると税負担率が下がる「1億円の壁」。株取引の優遇税制のためです。自民党総裁選の時、岸田首相が取り上げて話題になりましたが、これをグラフにし最初に問題にしたのが大門さんです(2007年予算委)。

消費者 悪徳商法 徹底追及

ジャパンライフなど、お年寄りを食い物にした悪徳商法追及の第一人者。訪問販売やマルチ商法などの契約書面を電子化する「書面デジタル化問題」の追及ではマスコミも注目しました(日刊ゲンダイなど)。

カジノ 反対運動 励ます

「カジノは人の不幸で成り立つビジネス」。大門さんは2009年から反対の論陣を展開。東日本大震災被災地のカジノ計画をやめさせるなど、全国の反対運動を励ましてきました。

議場が大門さんの味方に

大門さんの質問は、他党からも一目置かれています。「議場が大門さんの味方になってしまつ」と元閣僚。私は大門さんの影響を受けている」と発言した議員に対し「私も大門さんの話に引き込まれないよう注意している」と大臣も答弁し、議場は爆笑に包まれました。

「弱い人の味方やね」

(「母を語る」より)



母は女手ひとつで、四人の子を育てあげました。昼間は京都西九条のスーパーで、夜は先斗町の料亭で働きました。

末っ子で甘えん坊の私は母に会いたくて、夕暮れ時の鴨川ぞいを一時間ほど歩いて、料亭の前まで行きました。母は表に出てきて「よく来たね」と笑って頭をなで、電賃を握らせました。「一緒に帰ろう」というと、つよく抱きしめてくれました。

あるとき母は、大企業に就職した兄より、共産党の活動をしている私をほめてくれました。「みきは弱い人の味方やね」と。

なぜ共産党に入ったのかを思うとき、身を削って働いた母の姿が浮かびます。社会が、政治が、母のような女性をもっと助けてあげてほしかった。そういう政治にしなければと思いました。

今でも、夕暮れの街を歩いていると、ふと母と会うためどこかに向かっているような気がすることがあります。今度は私がつよく抱きしめてあげようと思いつながら。